



「月夜にひばりが足を焼く」。ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられている様子が表現されています。

昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様をお願いすることでした。

旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。大きな「はんぼう」(底の浅い大きな飯びつ)に水を満たし、そのまわりに、みんなで、蓑笠姿で集まり、神官がお祈りの神事をした後、はんぼうの水を笹の葉に付けては散らしながら、歌い踊り回りました。水がなくなると、うちわを持った者と入れ替わり、前後にふりながら、炎天下に何時間も踊り続けたものです。

その時、みんなで歌を歌いました。その一節に「六月やひでり続きで、ほこり立つ」という句があります。



背景

明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、田は亀の甲のようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、灌漑用水として、馬路川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしようがありませんでした。このため、農民は雨乞いをして、神様に雨降りの祈願をしました。

アクセス 八幡神社

- JR阿波池田駅より西南西へ直線距離約2 km
- 三好市池田町白地
- 緯度経度 北緯34度01分01秒, 東経133度46分48秒



黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。そこで村人は人柱を立てることにしました。昔は堰が決壊するのは祟り^{たた}のためで、人柱を立てて祈禱^{きとう}することにより堰が守られると考えられていたのです。村人は縦縞に横縞の継ぎ当てをした着物を着て通る人を人柱にすることに決め、あちらこちらの道の辻^{つじ}などへ立ち、縞の着物を着た人が通るのを待ちました。

毎日毎日捜しましたが、どうしても遭うことができませんでした。ところが三、四日たったある日の夕方、年配の遍路さんが足早に通りすぎようとしてきました。着物は縦縞でした。この人も横縞の継ぎなど当ててはいるはずがない、と思いながら通りすぎようとする遍路さんを見ると、なんと横縞の継ぎあてをしているではありませんか。

村人は、その遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていただくことを祈る気持ちで懇願^{こんがん}しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独^{てんがこどく}です。この世に生きるだけ生きて来ました。もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがあります。喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重におもてなしをしようとするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜しんで夜を明かしました。

翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と読経^{じきょう}が聞こえ、それに唱和して地上でも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と竹筒の音が聞こえなくなるまで、三日三晩祈り続けました。こうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊^{おんりょう}の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大早魃^{かんばつ}でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うともなく、この堰を「念仏堰」と呼ぶようになりました。



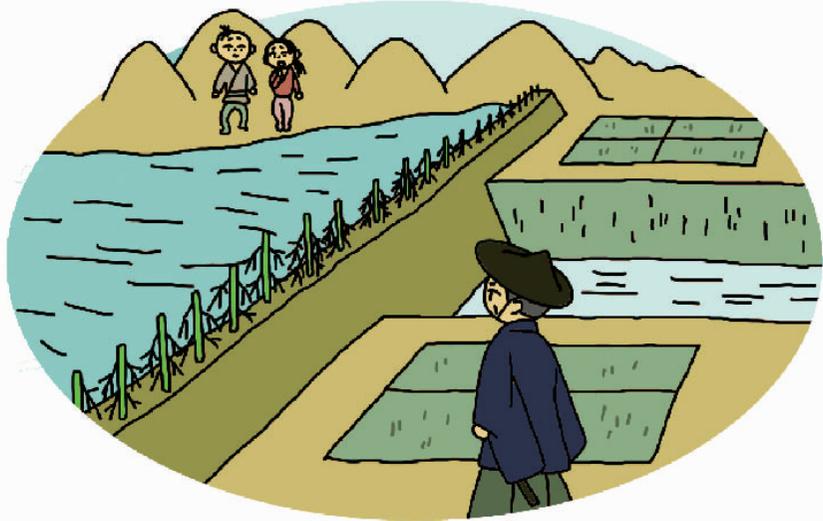
背景

昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは祟り^{たた}のためで、人柱を立てて祈禱^{きとう}することにより堰が守られると考えました。しかし、誰を人柱にするのかとなると、みな口をつぐんでしまいました。その中で、ある村人が、昨夜見た夢の中で、神様から「遠からずこの辺りを、縦縞の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことを話しました。村人はこの話に賛同し、縞の着物を着た人を待つことにしたのです。

アクセス 念仏堰 (加持川)

- 土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約2km
- 黒潮町加持
- 緯度経度 北緯33度02分37秒, 東経133度00分40秒





くに境→



関谷周辺の古地図（「伊予一国之絵図」
（大洲博物館保管）の一部、加筆）

背景

この話は、大洲市を流れる肱川の支流久米川の流域が舞台となっています。久米川は、大洲城の下流で肱川と合流しています。江戸時代には、久米川の流域は、上流が宇和島藩、下流が大洲藩の領地でした。しばしば、渇水になることがありましたが、両領民は久米川の水を分け合い、どうにか渇水を凌いでいました。この境界にあたる関谷は、両側から山脚が迫り、宇和島藩と大洲藩を分けていました。

アクセス

水争いを記録した石碑のある圓滿寺

- JR西大洲駅より西へ直線距離約200m
- 大洲市阿蔵
- 緯度経度 北緯33度30分27秒，東経132度31分25秒



ある年、大変な日照りが続いて、田んぼの稲は枯死寸前こしすんぜんという事態おちいに陥りました。こうなると、水の一滴は血の一滴です。水を惜しんだ久米川上流の宇和島領の農民は、川の流れをせきとめて、大洲領へは流れ込まないようにしてしまいました。困ったのは下流の農民です。水を分けてくれるようにと、たびたび掛け合いましたが、だめでした。なにしろ、死活に関する問題ですから、事がおだやかに済むはずがありません。おきまりの水争いとなり、けが人が出る騒動も絶えません。

このことを知った大洲の殿様は、「これほど大洲領の農民が難儀なんぎをしているのに、水を分けてくれないというのなら、今後宇和島領の水は一滴たりとも大洲領には入れさせない」と、さっそく、関谷地区に大きな土手を造らせました。この土手が出来上がったときに、奉行がその様子を報告しますと、殿様は、わざわざこの土手の出来ぐあいを見に来られて「なかなかよく出来た。これならば、水は一滴ももれないだろう」とおっしゃりながら、手にしていた竹の杖を地面に突き立てられました。

その後、次第に雨も降りはじめましたが、今度は弱ったのが上流側の人達です。何しろ、関谷地区に大きな土手を築いて、水の流れをせき止められたものだから、水のはけ場がありません。川を溢あふれた水が次第に溜まって、村全体が水没してしまいそうです。いまさらのように驚きあわてましたが、どうにもならないので、とうとう大洲の殿様にお詫びをし、今後はいつさい川をせき止めたりはいたしませんという約束をして、土手をとりのけてもらいました。

このあたりの竹は、大洲の殿様が堤防に突き立てた竹杖から根を出し、次第に茂つたものと言われている。殿様が竹杖を逆さまに付きたたてたものだから、この付近の竹はみな枝葉が逆さまに出ているのです。



背景

明和8年(1771)、上下麻生村と下五ヶ村(八倉・徳丸・出作・宮之下・上野)の水争いが起こり、死傷者が出ました。宮之下村と上野村が幕府領でしたので、裁判は幕府が直接備中(現在の岡山県南西部)で行いました。上下麻生村の者ははじめから加害者扱いされ、審理は長く続きました。この中で、下麻生村の組頭・窪田兵右衛門は郷里のことを考え、一身を犠牲にして首謀者と名乗り、倉敷の刑場で処刑されました。兵右衛門は義民として、砥部町八倉集会所裏の墓地に手篤く葬られています。この明和水論を契機として、赤坂泉がつくられました。

アクセス 窪田兵右衛門の墓と碑

- 松山ICより南西へ直線距離約1.5km
- 砥部町八倉210 砥部町の八倉集会所
- 緯度経度 北緯33度47分12秒, 東経132度46分29秒



世のため人のために一身を犠牲にして尽くした人のことを「義民」と言います。

明和八年(一七七二)夏は大干ばつでした。六月八日、八倉・徳丸・出作・宮之下・上野の下五ヶ村の農民七〇〇人が堰を切り落としたため、上麻生村と下麻生村の二〇〇余名と矢取川で乱闘となりました。この乱闘で死者二名と多数の重傷者を出しました。

水争いに関係した村々は、上麻生村と八倉村は大洲藩領、下麻生村は新谷藩領、徳丸村と出作村は松山藩領、そして宮ノ下村と上野村は幕府領でした。騒ぎが大きかったことと、天領から死者が出たため、一二月には勘定奉行から、関係者を備中代官へ差し出すよう命令が下されました。各村の庄屋・組頭・百姓代など三七〇余名が、翌明和九年(一七七二)二月に役人付き添いで郡中港を出発し備中へ出頭しました。当時、備中代官所陣屋は倉敷にあり、出張陣屋が笠岡に設けられていました。

吟味を受けた者のうち、上麻生村と下麻生村の者は初めから加害者扱いで牢舎につながれましたが、他の者はいずれも宿預かりという形でした。乱闘の際のことですので、首謀者も加害者も明らかになるはずありませんが、審理が長く続く中で、下麻生村の組頭兵右衛門が自分が首謀者であると名乗り出ました。村のみんなを助けるために我が身を犠牲にしたのです。

安永三年(一七七四)二月二三日、倉敷の判決で兵右衛門は死罪となり、その刑は即日執行されました。三五歳でした。砥部町八倉集会所前には兵右衛門の辞世の句碑が置かれています。

「如月のあわれたずねよ法の道」



明治・大正

背景

堰からの取水は当時の農民にとっては死活問題で、水争いが繰り返されてきました。そうした対立の中で生まれた約束が「大落水」です。「大落水」は、四日四夜を一区切りとして行うもので、その請求は何度でもできましたが、その執行権は上堰地区にありました。この話は、明治9年(1876)の菖蒲堰をめぐる水争いの様子を伝えたものです。

この他に、堰の修理についての約束もありました。昔の堰は、土砂と木で作られていたので、水漏れがありましたが、この漏れた水も下流にとっては大切な水だったからです。

アクセス 菖蒲堰(重信川)

- 川内ICより北へ直線距離約3km
- 東温市山之内
- 緯度経度 北緯33度49分25秒, 東経132度54分03秒



重信川には菖蒲堰があり、そこから田んぼの水を取っていました。菖蒲堰には、上堰と下堰がありました。渇水時には、上流の上堰で水を取ってしまうので、下流の下堰では水が取れなくなってしまうことが度々ありました。そこで、渇水時には下堰側の集落は、上堰側の集落に依頼して、上堰の取水を控えて下流に水を流してもらおう「大落水」という取り決めがありました。明治9年(一八七六)の水争いは、下堰側が請求した大落水が、上堰側の都合で遅れたことに原因がありました。

六月三〇日、上堰の落水が遅いため、下堰側の農民は怒り、数百人が堰を切り崩すという実力行使に出、双方に負傷者が出ました。早速、巡査や戸長らが仲裁に入りましたが解決に至りませんでした。七月四日になって巡査本署から仲裁案が提示されましたが、上堰側は「全ての田んぼの灌水は不可能で、苗も枯らせてしまう」として応じませんでした。そこで七月七日に下堰側の村々は、愛媛県権令岩村高俊に解決を依頼しました。

愛媛県は調査を行い、上堰側に対して「八月三日の午後六時から同月七日午後五時までの九六時間、三カ村へ大落水を執行せよ」と命じ、八月一〇日には今後の大落水について下堰側に対して「菖蒲堰分水は従来からの明確な規定はなく、年々臨時処分をして分水する慣行であるので、そのままこれを据えおくことにする。しかし、今後は役場が指導して、上下の水勢を見計らい、水量を加減して配水をし、特別に用水が不足すれば大落水を実施する」というような通知を出し、また上堰側にも「下堰側に用水が特に不足したときに臨時差配をするよう区長にも達しておいたので、その指示に従うこと」というような指示をしました。

江戸



背景

愛媛県の宇摩地域は、昔から水不足に悩まされてきました。この地域では、法皇山脈を越えた向こうには銅山川が流れ、吉野川に注いでいます。山の向こうの水をこちらに引いてきたい。宇摩地域の人々は江戸時代末期以降、銅山川の分水を本格的に考え、さまざまな困難を経て、ついに昭和25年（1950）に銅山川の水が宇摩地域に流れ込みました。今日では、柳瀬ダム、新宮ダム、富郷ダムの連携により、宇摩地域への水の安定的な供給が図られています。戸川公園には銅山川疎水組合功労者頌徳の碑があります。

アクセス 戸川公園

- JR伊予三島駅より東へ直線距離約2.5km
- 四国中央市上柏町
- 緯度経度 北緯33度58分27秒, 東経133度33分57秒



宇摩平野は細長い帯状をなして瀬戸内海に傾斜しているため、川はみな短く、農民はため池と井戸水に頼るしかありませんでした。このため、昔から三年から五年を周期に、干ばつに見舞われてきました。

安政二年（一八五五）も大干ばつでした。井戸は涸れ、池も底をつきました。農民は万策尽きて、一勺（二ミリリットル）の水にも血を流すほど真剣になりました。しかし、峰一つ越した銅山川には水がとうとうと流れています。あの水をこちらに通すことができたらと、農民が思い詰めたのも無理はありませんでした。

この農民の悲痛な願いに、三島・中曾根・松柏・妻鳥の庄屋たちが立ち上がり、連名で三島代官所に「大川河水利用目論見書」を差し出しました。これはノミと鍬で法皇山脈をくり抜こうとするもので、代官から一蹴（いっしょく）されましたが、銅山川疎水（そすい）の着想はこの時が始まりです。

その後、幕末、明治・大正時代にも、代官や地元有志や企業などによって銅山川疎水計画が立てられましたが、利害調整などもあり、いずれも実現には至りませんでした。愛媛県は内務省などにも働きかけ、昭和十一年（一九三六）に徳島県との間で銅山川分水協定が調印され、事業が開始されました。しかし、戦争のため中止を余儀なくされ、工事開始は戦後まで待たなければなりませんでした。

昭和二十五年（一九五〇）八月二四日、通水式が行われました。安政二年以来、九六年が経過していました。山の向こうの水が法皇山脈をくぐり、流れ込んで来ました。ワツとあがる歓声、涙をたたえて手で水をすくう老人、一升瓶（いっしょうびん）に水を詰めて持ち帰る人、まことに感激の一瞬でした。



▲子どもたちの植樹



▲早明浦ダム

背景

平成6年(1994)は異常な^{かつすい}渇水の年でした。^{りょうなん}綾南町では、水不足の危機的な状況の中で、無形文化財としてではなく、真剣に雨の到来を祈念して滝宮天満宮で念仏踊りの^{ほうのう}奉納が行われるほどでした。また、町民は、町の呼びかけに応じて連帯して懸命に節水に努力しました。大渇水をしのぐことができた要因の一つとして、綾南町では、こうした町民の努力の他に、先人が築いたダムと用水路による「命の水」があったことを伝えています。

アクセス 香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約3km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経133度45分51秒



平成六年(一九九四)は歴史的な渇水の年でした。
七月二日の梅雨明け以降、^{りょうなん}綾南町(現在の綾川町)の町民は、^{もうれつ}猛烈な暑さと異常な渇水のため^{しやうそうかん}焦燥感を感じていました。七月二四日に^{さめうら}早明浦ダムの貯水率はゼロとなり、別枠の発電用の用水に頼ることになりました。二日後に台風七号の接近により^{じゆう}慈雨がもたらされ、貯水率は三一パーセントにまで回復しましたが、その後再び貯水率は低下し、危機的な状況となりました。この危機を救ったのが八月一六日の台風一四号と九月三〇日の台風二六号でした。
この歴史的な大渇水を乗り切ることができた要因の一つは、香川用水が命の水を送り続けてくれたことです。渇水に心をいためた期間、住民は、毎日テレビに映し出される早明浦ダムの風景を食い入るように見つめていました。あのダムに残された水だけが、香川県の、そして綾南町の住民の命を支えてくれていたからです。台風によって早明浦ダムに勢いよく流れ込む水を見て^{かんせい}歓声を上げるような気持ちとともに、今更ながら、先人の果たした偉業に^{きょうたん}驚嘆する思いでした。「四国は一つ」の言葉を実感したものでした。
この年以降、香川県の中学一年生は、遠足に香川用水関連施設を見学することが^{こうれい}恒例となり、早明浦ダム周辺に中学生の手で植樹を実施するような風景も見られるようになりました。



▲萱原用水を導水した大羽茂池



▲大久保大明神

背景

萱原用水は、綾川町正末で綾川の水を取り入れ、大羽茂池に達する14kmの用水で、綾川町萱原周辺の灌漑用水源です。かつてこの辺りは干害に苦しめられることが多く、特に元禄10年（1697）から連続して干害に見舞われ、元禄14年（1701）には270人が餓死しそうになったそうです。この窮状を救うために奮闘したのが、萱原村の庄屋であった久保太郎右衛門です。大正9年（1919）に建立された太郎右衛門の彰徳碑は、今日も地域の人々に大切にされています。

アクセス 萱原用水の碑

- 琴電琴平線滝宮駅より東へ直線距離約1km
- 綾川町萱原
- 緯度経度 北緯34度14分46秒、東経133度55分50秒



萱原周辺は水利の便が悪く、用水確保に苦勞していました。このため、ため池が多く築かれ、水田が開かれていましたが、日照りがあると稲は立ち枯れになることもありましたが、

久保太郎右衛門は、延宝四年（一六七六）萱原村（現在の綾川町萱原付近）に生まれ、二〇歳で庄屋になった人です。太郎右衛門は、農民の苦しみを何とかして救済しようとして、綾川の水を水路に入れ、多くの溜池に注ぐことを考えました。自ら測量をし、山田村（現在の綾川町山田付近）の正末から大羽茂池に達する水路の計画を立てました。

この計画を高松藩庁に願い出しましたが、許可はすぐには出ませんでした。重ねて願いをしていると、太郎右衛門が二八歳の元禄一六年（一七〇三）、一部について許可が出て、数ヶ月で工事を完成しました。しかし、水は池に届かなかつたので、藩主に直訴してもとの計画を認めるよう嘆願しました。そこで太郎右衛門は捕らわれ、投獄されました。

太郎右衛門の妻は金比羅さんにお参りし、太郎右衛門を父母のように慕っていた村人も釈放を懇願しました。釈放後、太郎右衛門は藩老に水路計画の事情を涙ながらに訴え、その志に藩老は感激して、宝永四年（二七〇七）、太郎右衛門に許可が下りました。太郎右衛門は早速用水取り入れ口からの水路の工事にかかり、その年のうちに完成しました。三二歳でした。

この萱原用水の完成によって、村々は綾川の恵みに浴することになり、開拓も進みました。



▲高塚山から新池を望む

背景

高松市香川町の新池では、旧暦の8月3日に実った農作物でおどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩き、最後は皆がため池に飛び込むという「ひょうげまつり」があります。「ひょうげまつり」とはひょうきんまつりという意味で、昔、地域の人々のために新池をつくった矢延平六のご恩に報いるためのお祭りです。香川県の無形文化財に指定されています。新池を見下ろす高塚山には、矢延平六を祀った新池神社があります。

アクセス

新池神社 (高塚山)

- JR高松駅より南へ直線距離約12km
- 高松市香川町浅野
- 緯度経度 北緯34度14分54秒, 東経134度02分57秒



旧浅野村一帯(現在の高松市香川町浅野地区)は稲作りに必要な灌漑用水が少なく、干ばつに悩まされることがたびたびでした。村人たちはため池をつくる計画を立て、藩に願い出ました。その陣頭に立つて指図をしたのが矢延平六でした。平六は、村の西を流れる香東川の水を引き入れることを考え、多くの人々が力を合わせ、ついに新池という大きなため池を築きました。村人は喜び、平六は村人たちに心から慕われていました。

しかし、世の中はままならず、「新池を造ったのは高松城を水攻めにするためのもの」などといううわさが広まりました。このため、平六は八月三日、裸馬にのせられて阿波国へ追放の身となりました。

恩人を慕う村人たちは八方手を尽くし、平六を探し求めましたが姿を見付けることはできませんでした。そこで、平六のご恩に報いるため、高塚山に平六を祀り、巡りくる収穫期ごとに祭りをを行い、追慕の念を高めてきたのです。

この祭りは古くから浅野地区の人々によって継承されており、神具はすべて農作物や家庭用品などを中心に整えられています。





昭和一四年（一九三九）は大干ばつに見舞われました。高松市川島地区では、四箇池しつかいけの潤す田以外では田植えのできなかつた田もありました。また、田植えのできた田地も、八月中旬ごろから溜池なみいけの水が底をつき、稲田は真っ白になり、地面は亀の甲のように割れてきました。見るに見かねた農家の人は、出水や四箇池の水路から夜を徹して水を汲み上げ、出穂前の稲を助けようと懸命の努力をしました。ポンプ用のガソリンも不足し、共同で円座・仏生山ぶつしょうざん・平井まで買いに歩きましたが、その労も実らず、高台では四分の一の収穫しか得られませんでした。

七月二三日には、香川県の藤岡長敏知事が、自ら祭主となって滝宮天満宮で雨乞い祈願をし、八月一日より三日間、城山神社でも降雨祈願をしました。また、県は各市町村に対し、雨乞いをするよう通達を出しました。由良山・土佐山でも三度ほど雨乞いの火を上げました。九月には、学童が日の出と日没前に土びんで稲に水をかけるよう、各学校へ通達を出したほどです。

この年の米の収穫量は、県で平年一三万七、八〇〇トンのところ、五四パーセントの七万四、六〇〇トンしかありませんでした。農家では、供出米が納められず、保有米もなく、苦しい生活を余儀なくされました。県では一〇月、白米食の廃止はいし、七分づき米の常用・雑穀との混食ざっく・粉食こな励行、麦食奨励の条例を制定したほどで、米価は急激きゅうてきに高騰こうとうしました。

昭和三〇年代以前

背景

昭和13年（1938）10月から14年9月までの1年間の雨量は、675.7mm（多度津測候所）で、例年の約半分に過ぎませんでした。高松市川島地区では6月14日未明に少し降ってからは空梅雨の状態で、9月11日まで雨らしい雨がありませんでした。このため、県知事が雨乞い祈願をするとともに、県は学童に対して「土びん」で朝と晩に稲の根元に水をかけるよう学校に通達を出したほどでした。

アクセス 滝宮神社

- 琴電琴平線滝宮駅より西へ直線距離約300m
- 綾川町滝宮
- 緯度経度 北緯34度14分59秒，東経133度55分09秒



江戸



▲香水箱

背景

四国の中でも特に雨が少ない香川県では、現在のように香川用水ができて吉野川から水が供給されるまでは、満濃池まんのうに代表されるため池が多く造られ、水不足に備えていました。池の水が少なくなると、たいていの土地では、できるだけ渇水被害を小さくするため、池の水を順番に配水していく「番水」が行われていました。しかし、時計のない時代に、公平に田に水を引くためには工夫が必要でした。そこで使われたのが「香箱」です。香箱で線香を燃やして、決めた長さごとに太鼓で合図をして引水を交代していたのです。

アクセス 平池

- JR高松駅より南へ直線距離約9km
- 高松市仏生山町
- 緯度経度 北緯34度16分17秒，東経134度02分43秒



時計のない時代に、少ない水をできるだけ公平に田に引き入れるために、人々は工夫をしました。高松市の多肥たひでは、平池の用水配分に、大正の頃まで、香を焚たいて水の配分をしていました。長さ六〇センチメートル、横三五センチメートル程の香箱の中に灰をつめ、中に竹節を欠いた二つ割の竹を三個、箱の長い方に平行させて置き、その竹樋たけどいの中に線香の粉を入れ、その粉に火をつけ、その燃えて行く寸法を測定して、田の給水時間を決めたものです。

香を焚く時には、人手が最低限三人は必要でした。二人は民家において香を焚いた香箱を見つめます。時間が来ると、太鼓で合図をします。もう一人は股守またもり（水路の切り替え）に出掛けます。これを「水ばし」または「井手ばし」と呼びました。これに当たった者は枕蚊帳などを持参して水路の端で待機をしていました。太鼓の合図にこたえて股守に出た「井手ばし」はあらかじめ持参をしている鉦かねをたたいて「わかった」と合図をします。そして、水路を切り替えて次の田に水を流しました。

こうして、平池の用水が流れるようになると、順番に田に水を引き入れるために、香箱の中で香を焚いたものでした。



江戸



▲白川原池

背景

香川県さぬき市志度町に白川原池というため池があります。300年以上も前に、庄屋が村人のためを思い、腹切り問答の末、藩から築堤の許可を得て完成させた池です。そして、この庄屋に感謝して、干ばつ時にも庄屋家の田だけは水を絶えさせまいと、村人たちが築いた小さなため池があります。能徳池と言います。二つのため池は今も立派に機能し、ため池をめぐる人々の思いやりの心を伝えています。

アクセス 能徳池

- 津田寒川ICより北へ直線距離約3km
- さぬき市志度町鴨部
- 緯度経度 北緯34度19分15秒，東経134度13分55秒



村の庄屋矢田助右衛門は、深谷川という谷に土手を築いて水を溜め、下流の未開拓地に五〇町歩の水田をつくる計画を立てました。これを時の高松藩主に許可を歎願したところ、普請奉行が下検分の結果、築堤付近の岩盤はその肌が傾斜しているから貯水が無理であるという理由で許可になりませんでした。

検分使が帰った後で、諦めかねて助右衛門は、意を決して裸馬に跨り役人の後を追いました。やっと屋島付近で追いついて重ねて心情を訴え許可を歎願しました。その時いわゆる腹切り問答がなされました。それは、「もし水を溜めることができなければ、腹かき切つて詫びる」というものでした。この自信と決意が通じて工事はついに許可されました。

助右衛門は悲壮な覚悟で工事に着手しました。工事は至難な大工事でしたが、命をかけた助右衛門の至誠が工事に携わる人に通じないはずはなく、監督する者もされる者も、ただ成功の一点を目指して働き抜きました。こうしてついに完成したのが今日の白川原大池です。

助右衛門の死後、この偉大な業績を讃え、末代の受益を感謝して、村人たちは助右衛門の屋敷裏に再び池を築きました。干ばつの年、白川原池が「おほらい」する前にまずこの池に導水して、矢田家所有の田だけは干ばつから守ってあげようというのです。名付けて能徳池と言います。

人々の感謝の気持ちは、地域に伝わる歌に示されています。「白川原大池干潟になると、能徳池には水絶つまいぞ」



背景

眞鈴は徳島県との県境に近い香川県の山奥の集落です。この話は、日照りで水がなくて困っていたところに、お坊さんがやってきて水を所望されるので、おばあさんが快く水を差し上げると、飲まれたお坊さんが地面を杖で突き、水があふれ出てくるようになったという話です。同様の弘法大師信仰の話は四国各地にあります。今日、香川用水をめぐって県を越えた人々の複雑な感情もあると考えられますが、自然が与えた水の恵みを、県境を越え思いやりの心で分け合うことの大切さをお大師様が伝えているとも言えます。

アクセス 香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約3km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経133度45分51秒



暑い日の盛り、讃岐の山奥に一人のお坊さんがやってきました。お坊さんは、おばあさんに「すまんことだが、お茶を一杯いただけられないものかな」と言います。おばあさんは、

「このごろは日照り続きで水は少ないのだけど、お坊さんがあがるくらいの水はあるわな」と快く水を差し出しました。おいしそうに水を飲まれたお坊さんは、

「そんなに、水が不自由なのかい」

と言いながら、杖を突いて屋敷の周りを歩かれ、ある一点で歩みを止め、地面を杖で突くと、不思議や水がどンドン湧いてきます。おばあさんは、お坊さんにお礼を申さねばと思い、辺りを見回しましたが、お坊さんの姿はもう見えませんでした。

「ありがたいことじゃ、ありがたいことじゃ」

と、おばあさんは喜びながら、水に手を入れてみました。すると、水の中で、お坊さんが持っていた鈴のよな音が「ちろん、ちろん」とかすかに響きます。眞鈴と呼ばれるようになった由来です。

隣村から、少し水を分けてくれないかと言ってきました。おばあさんは、

「水がないのは不自由なことだ。いくらでもくんでお帰りよ」

と親切そのものです。隣村といっても、県境に位置するところなので、阿波の大屋敷からも水もらいに来ました。水を担い桶(天秤棒にぶら下げて運ぶ杉と竹でできた桶)に入れて一荷にし、国境を越えて帰って行きます。そして、お礼にそば一升。水とそばを交換して仲良く暮らした山の村でした。